



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339



白浜での臨海実習 初めてのスキューバダイビング

特集 他分野からみた野外教育への期待と課題

巻頭言「私の野外教育との出会いから今まで、そしてこれから」	福富 優	2～3
特集「他分野からみた野外教育への期待と課題」		3～7
第 28 回大会速報		8
若手コラム		9
海外研修報告		10～11
新刊紹介・イベント告知		11～13
事務局便り		14～15

巻頭言

私の野外教育との出会いから今まで、そしてこれから

福富 優（至学館大学）

みなさんはどのように野外教育に出会ったのでしょうか？本稿では、私の野外教育との出会いから、この分野に身を置くことになった経緯、そしてこれからについて紹介させていただきたいと思います。

私は、将来中学校の教員になることを志し、信州大学教育学部の数学の教員免許を取得する専攻に入学をしました。元々数学と体育が得意で、将来教員になることを見据えたときに、前者の教員免許を取得しておいた方が採用試験で有利ではないかと考えたためです。しかしながら、大学に入学後間もなく、保健体育の教員免許も取得したい思いが強くなり、保健体育の教員免許取得のための授業も受け始めました。保健体育の教員免許を取得しようとする中で、私の恩師である本学会現会長の平野吉直先生の授業があり、そこで平野先生と出会いました。平野先生の授業はとにかく面白く、「こんな教育の形があるんだ！」という目から鱗の体験を次々とし、学校教育とは異なる教育の在り方に魅了されていきました。気が付けば野外教育の虜となり、数学をそっちのけで平野研究室の活動にひたすら参加するようになっていました。

平野研究室の野外実習では、人として非常に大きく成長をさせてもらいました。みんなが働いているにも関わらず、仕事を見つけられずにぼーっとしている自分に気づかされることが多々ありました。いい歳をして、相手を思いやることもたくさん勉強しました。同級生から「優のこういうところは良くないと思う」という指摘を真正面から受けることもありましたが、それすら貴重な体験だと思うことができ、とにかく濃密で前向きな時間でした。今私が野外教育を仕事としているのは、このように私を成長させてくれた野外教育という分野への恩返しをしたいという気持ちが心の奥底にあるからかもしれません。

夏のたくさんの野外実習を終えた大学 3 年生の秋、私は思い切って「大学院で野外教育を勉強したいです」と平野先生に打ち明けました。平野先生は二つ返事で「ウェルカムだよ」と言ってくれました。その時の私

は、将来の就職のことなど一切考えずに「ただただ野外教育についてもっと知りたい」という気持ちであったことを記憶していますが、今になって思えば、平野先生からいただいたその返事が私の人生を大きく方向づけたこととなります。大学院に進学後は、ひたすら野外教育を勉強しました。大変ありがたいことに多くの方から実践の機会をいただくことができ、いろいろな現場を経験させてもらいました。大学院修士課程 1 年目を終える頃には、将来の就職希望が「学校教育」から「野外教育」に明確に変わっていきました。

大学院修了後の私は、国立立山青少年自然の家で社会人としての生活をスタートさせました。平野先生のもとで学んだことを少しでも発揮しようと、時には当時の所長に直談判をし、幼児キャンプの立ち上げや主催事業に関わる調査研究など、多くのことにトライさせていただきました。当時の所長は若輩者の私のやりたいことを一切否定せずに受け入れてくださり、そのおかげで多くの経験を積むことができたことは、とてもありがたいことでした。その後、縁あって現職である至学館大学に着任し、現在は平野先生が私にしてくださった数々のことを思い出しながら試行錯誤を繰り返す日々を送っています。

さて、これからについても少しだけ書かせていただきます。平野先生との師弟関係の中で、最近は「守破離」を意識することが多くなりました。「守破離」とは、茶道や武道などの修業における過程を示したものであり、「守」は師の教えを忠実に守り確実に身につける段階、「破」は他の師などの教えについても良いものは取り入れ発展させる段階、「離」は師の型から離れ独自の新しいものを生み出す段階とされています。自然の家に勤務していた頃を振り返ると、明らかに「守」の段階であったと感じます。近年は、依然として「守」を大事にしつつも、様々な団体との交流を深め、そこで得られた新しい知見を次々と自分の現場に落とし込んでいる「破」の段階を感じるようになってきました。さあこれからは…多くの先生方から

学ぶ姿勢を常に持ち続け、自分の強みは何か、自分にしかできないことは何か、そういったことを模索していく「離」に向かって日々精進してまいりたいと思います

ます。今後とも、諸先生方からのご指導ご鞭撻を心からお願い申し上げ、本稿を締めさせていただきます。

特集「他分野からみた野外教育への期待と課題」

野外教育は、自然との直接的な関わりを通じて、さまざまな学びを促す教育的手法として長年にわたり実践と研究が積み重ねられてきました。しかし、私たちがその実践の現場に深く関わっているがゆえに、野外教育の持つ魅力や価値、さらには内在する課題や問題点を、かえって見落としてしまうこともあるのではないのでしょうか。

そこで本稿では、スポーツ心理学、スポーツ哲学、教育学、創造的な学びといった他分野の視点から、野外教育に寄せられる期待や、今後の課題についてご執筆いただきました。多様な立場からの示唆が、野外教育の可能性をより深く捉え直す契機となることを願っています。

野外教育に対するスポーツ心理学からの期待

土屋 裕睦 氏

(日本スポーツ心理学会理事長、大阪体育大学)

本務校である大阪体育大学の野外実習はユニークで、伊原久美子教授や徳田真彦講師といった専門家の指導の下、私のような野外教育の素人にも研修の機会が与えられ、実習担当のスタッフの仲間に入れてもらえます。本学での勤務も 30 年近くなり、夏は YMCA 阿南国際海洋センターへ、冬は菅平高原スノーリゾートへと、野外実習のスタッフ気取りで通い続けてきました。しかし体験すればするほど、野外教育においては、専門家と素人スタッフとの間には、大きな差があることを痛感します。

筆者はスポーツ心理学が専門ですが、基礎研究よりは応用・実践に興味があり、大学に設置されたスポーツカウンセリングルームで心理相談を担当しています。他にプロスポーツチームや日本代表チームでチームビルディングなども担当しており、学位論文もこれらの実践をまとめて執筆しました。したがって、野外教育で重視される「体験学習」や「冒険教育」にはとても親近感を感じています。また野外実習スタッフとして、海洋や雪山のような非日常の場で、学生たちと寝食を共にする経験は、スポーツ心理学の実践においても大いに役立っています。

例えば、昨夏の 2024 パリ五輪ではウェルフェアオフィサーとして日本選手団に帯同し、約 1 か月にわたり選手村にてサポート活動を行いました。オリンピッ

クなどの結団式では、競技横断的な交流を深める目的でアイスブレイクを取り入れたりしますが、集団凝集性や集合的効力感を高めるアクティビティなど、野外教育は集団作りへのヒントに事欠くことはありません。また、個に目を向ければ、様々な挑戦的な状況における自己決定の促進、動機づけの内在化、ストレス対処を通じたレジリエンスの向上なども、アスリートの実力発揮に欠かせない心理的要素であり、野外教育の実践に学ぶところが大きいと感じてきました。

一方、公認心理師・スポーツメンタルトレーニング指導士の資格取得の過程で、カウンセリングや臨床心理学の訓練を受けてきたので、野外教育との相違点を感じることもあります。一例を挙げると、野外教育もカウンセリングも、参加者（来談者）のウェルビーイングをねらいとしていることに異同はないと思われますが、カウンセリングでは「語ること (dialogue)」を手がかりにした人間関係を基盤にしているのに対し、野外教育は「行うこと (experience)」を通じて、気づきや深い自己理解がもたらされるという前提があるように感じます。むしろ自然体験の中での自己対話こそ、野外教育に特徴的な治療的・教育的な営みの基盤なのかも知れません。

野外教育の専門家と活動をともにすると、彼らが参加者の言語的表現よりも、身体表現や行動をよく観察していることに気づきます。時に黙して語らず、参加者の心理的・身体的安全を担保するために、自身も環境の一部となって参加者に供しているような場面にいくわすこともあります。言い換えれば、自然という

器（環境）が、変容の場になりうることへの、深い信頼感でしょうか。この点が野外教育の専門家の特徴であり、素人がなかなか真似できないと感じるコンピテンシーの一例です。

正直なところ、心理学者としては活動中、言語化されないことに手ごたえのなさを感じる時もあります。しかし、実習の後半になってダイナミックな行動変容が、個人レベルでも、集団レベルでも起こることがあり、その威力を目の当たりにしてきました。個人の効力感がリーダーシップやライフスキルとして表出され、それがグループ内の相互交流につながり、チームワークや集団パフォーマンスへと昇華するような状況を度々経験してきました。

何より、卒業生たちに会うと、部活での辛かった思い出とセットで、必ず野外実習での楽しかった思い出が語られることから、彼らの人生において忘れられない体験であったことが読み取れます。野外実習の愛好家としては、学会を通じて、野外教育ならではの魅力や教育効果を、これからも発信していただけることを期待しております。

**無料の世界で野外教育は何を「つくる」のか：
体育・スポーツ哲学からみた野外教育への期待と課題
坂本 拓弥 氏
(筑波大学 体育系)**

現代では、多くのものが無料で提供—サービス—される社会が実現しています。YouTube は広告さえ我慢すれば無料で見続けることができますし、X や TikTok、LINE といった SNS もそのほとんどの機能が無料です。昨今話題の ChatGPT も、最上級の性能を求めなければ誰もが無料で利用できます。これらに加えて各種の「サブスク」も、感覚的には同じようなものかもしれません。ほかにも様々な例があるように、私たちが生きる現代社会は、多くのものが無料で楽しめてしまう、いわば「無料の世界」なのです。

そのような無料の世界を当たり前のように受け入れている私たちの価値観は、現代社会における「効率性」の重視と強く結びついています。「コスパ」や「タイパ」といった言葉が象徴しているのは、まさにその強力な結びつきです。そこに見られるのは、時間や労力、つまりは「手間ひま」をかけることを、できる限

り排除したいという現代人の欲望です。その欲望によって、疲れることや面倒なことは、すべて無駄だと見なされるようになります。無料の世界では、経済的なメリットの裏側で、「手間ひま（労力と時間）をかける」という古代から人間が続けてきた営みが、無価値なものに成り下がってしまうのです。

現代社会がそのような特徴をもっているならば、それは野外教育にどのように関係するのでしょうか。例えば、「グランピング」と呼ばれる野外活動の亜種があります。この現象の興味深い点は、たとえ金額が高くとも、道具の持ち運びや設営といった労力と時間が省けるならばそれもやむなし、という価値観が見られることです。つまり、「手間ひま」を省くためならお金まで出す、という現象が起きているわけです。そしてこの点は、野外教育が大切にしてきた価値観と真っ向から衝突するのではないのでしょうか。

私がそう感じる 1 つの理由は、私自身の経験に根差しています。例えば、私が今もお世話になっている千葉県キャンプ協会では、上述の現象とは正反対の生き方をしている人々に、数え切れないほど出会ってきました。例を挙げれば本当にきりがありませんが、地域の子どもたちのために手弁当でクラフトなどの材料を準備する人、貴重な休日を家族や仲間とのキャンプのために数百キロ運転していく人、なかには、自腹で畑を買い上げて、そこをみんなが利用できる簡易キャンプ場にしたり人までいました。一体、何がそのような行動を可能にしているのでしょうか。

それらの行動が、持続可能性の観点からよいのか悪いのかは、ここでの問題ではありません。重要なことは、そのような人々が野外教育をその土台のところで支えていた事実です。より厳密に言えば、そのような人々が野外教育によって育ち、これまで生きていた、という事実なのです。彼らのように「手間ひま」（とお金）をかけることを惜しまずに、多様な他者のために動き、ともに遊べる人を、野外教育は「つくって」きたということなのかもしれません。そして、そのような人がもつ価値観は、現代社会が便利になった裏側で失われたことの 1 つでもあるはずです。

私たちはなぜ、時間をかけ、体力を削り、そして大なお金を費やしてまで、山に登り、テントを張り、火を囲み、そこに集うのでしょうか。この問いに対して、その生理・心理的な効率的な成果だけでなく、私たち自身の生き生きとした（現）実感（覚）を言葉に

のせ、多くの他者と共有していく必要があると思います。それはきっと、野外にかかわる子どもたちや大人たちの生き方そのものに光を当て、さらには、それを変える一つくる一可能性をも拓くはずです。

と、なんだか偉そうなことを言ってしまいましたが、そのような試みを探究するために、私自身が今考えていることを最後に述べたいと思います(坂本、2025)。例えば、20 世紀ドイツの哲学者ヘルマン・シュミッツ(1986)は、独特な思索を展開していますが、その中でも興味深いのが「雰囲気」を巡る議論です。雰囲気は、私たちが人間関係やチームワークを考える際に不可欠のものであり、野外教育でも重要なはずです。

この雰囲気という言葉は、英語では atmosphere なのですが、これは同時に、大気や気候、天気を意味します。つまり、私たちが普段気にかけている雰囲気は、本来、天気や気候といった自然現象と不可分のものだというところを、シュミッツは指摘するわけです。確かに、雲が多く湿度の高い日には、私たちの気持ちもどんよりしがちかもしれません。

この点は、野外教育に関連して、興味深いことを私たちに教えています。なぜなら、それは、もしかすると雰囲気が天気や気候と同じように、私たちがコントロールできない性質を持っていることを示唆するからです。そして、そのコントロールできないことこそ、私たちが野外において直面する自然の別名にほかなりません。さらに言えば、そのようなコントロールできないことは、効率性を重視する無料の世界では無駄なものでしかありません。しかし、私たちが野外で、仲間と特に何をするでもなく、ただともに居る時間と空間は、決して無駄ではないと、少なくとも私は確信しています。そこには、予定調和ではない「何か」が、コントロールできないものとして確実に存在しているはずなんです。

ちなみに、この原稿は貴学会理事の中丸信吾先生より依頼を受けて執筆したものです。私が中丸先生と偶然出会った場所は、ほかでもなく先述の千葉県キャンプ協会です。その意味では、コントロールできない偶然の積み重ねが、私と野外教育学会のみなさまとのつながりを生んだ一つくった一わけです。そして、どこまでも効率性を追求する無料の世界において、そのような偶然性を自らの強みにできる貴重な存在が、きっと野外教育の世界なのだと私は思っています。

参考文献

坂本拓弥 (2025) 子どもたちのための体育をつくる哲学：身体・遊び・テクノロジー. 大修館書店.

シュミッツ：小川侃編 (1986) 身体と感情の現象学. 産業図書.

他分野から見た野外教育への期待と課題：

教育学の視点から

松尾 美香 氏

(名古屋市立大学 高等教育院)

専門分野：高等教育、初年次教育、
教育評価、アセスメント

冒険教育との邂逅と研究の原点

専門外の「冒険教育」の力に魅せられたのは、奄美大島でのシーカヤック実習で出会った学生 A がきっかけでした。学生 A は、吃音と軽度の発達障害により、他者とのコミュニケーションに困難を抱えていました。しかし、自分では制御できない自然環境を「一人では乗り越えられない」と実感し、勇気をふりしぼり、仲間に助けを求めました。この学生 A の行動は、彼自身の変容の始まりであると同時に、集団全体に連鎖的な変化をもたらす触媒となったのです。学生 A の勇気に呼応するように相互支援の輪が広がり、チームに協同性が育まれていく様子を私は目の当たりにしました。この体験を契機に、学生 A は多くの困難を乗り越え、大学を卒業し社会へと羽ばたいていきました。この劇的な成長は、私の研究者としての姿勢を根底から揺さぶりました。

野外教育研究が抱える課題と理論的深化の必要性

そこで先行研究を渉猟すると、社会的スキル、自己効力感、リーダーシップなどの向上が示されているものの、いくつかの課題が浮かび上がってきました。第一に、多くの研究が短期的な効果検証に留まり、学生 A に見られたような教育効果の持続性や発展のプロセスが未解明であること、第二に、「野外教育」の定義が曖昧なため、研究知見の比較や統合が困難になっていること、そして第三に、実践を支える理論的枠組みが脆弱であることです。例えば、Brown (2008) は本領域が理論的基盤を十分に吟味してこなかった傾向を、また Cooley ら (2015) は研究手法の厳密性の欠如を指摘しています。これは、参加者の変容の過程をみてし

まうため、実践者の主観的な解釈に陥りがちであることに加え、長期的な教育効果を測定しようとする、その間に生じる他の多様な経験と冒険教育の教育効果だけを切り出して抽出することが難しいからでしょう。

本領域がさらなる発展を遂げるには、心理学、社会学、教育学、環境学など複数の学問領域の視点から理論的基盤を構築することが重要だと考えられます。

学習理論に基づいた 10 年間の実践と研究成果

学生 A との出会いから約 10 年、学習理論に基づき授業設計を見直し、量的・質的データを組み合わせた混合研究方法によって、研究の妥当性と信頼性の向上に努めてきました。その結果、教育学の視座から、冒険教育が大学教育において、(1) 協同作業が不可欠な冒険教育を通じ、コミュニケーション能力や対人スキルである社会的スキルの涵養ができること、(2) 入学直後の冒険教育は、人間関係の構築を助けるとともに、大学への適応を促進し、帰属意識を向上できること、(3) 冒険教育によって身体に刻み込まれた経験が、学生の参照の枠組み(視点、心の習慣、マインドセット)を構造的に変化させ変容的学習をもたらし、継続的にその経験を新たな経験や教室での学びに有機的に関連づけていく学びの好循環を生み、長期的な教育効果を支えることを明らかにしました。

おわりに

仲間と協同して困難な課題に挑戦する経験を提供できる野外教育や冒険教育は、社会が求める人材育成に大きく貢献する可能性を秘めています。そのような身体に刻み込まれる経験は、自分と他者、または自分自身との関係を見つめ直す機会となるからです。特に AI 時代に求められる人間力の育成に大いに寄与できるでしょう。

北米の大学で新入生オリエンテーションに野外教育や冒険教育が活用されています。日本でも初年次教育やキャリア教育といった多様な領域でその価値が広く認識され、活用されることを期待しています。そのためには、強固な理論的基盤や確固たる教育効果のエビデンスを示していく研究活動が求められます。

引用文献

Brown, M. (2008). Comfort Zone: Model or metaphor? Australian Journal of Outdoor Education, 12 (1), 3-12.

Cooley, S. J., Burns, V. E., & Cumming, J. (2015). The role of outdoor education in facilitating groupwork in higher education. Higher Education, 69, 567-582.

「創造の場」としての野外教育

伊勢 壮太 氏

(武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所/
博報堂こそだて家族研究所)

1. はじめに：ビジネスデザイナーが研究する「創造的な学び」

皆様、はじめまして。私は、普段、広告代理店でストラテジックプランナーとして働く傍ら、武蔵野美術大学ソーシャルクリエイティブ研究所の特任研究員として「創造的な学びのデザイン」をテーマに研究を行っています。「共創のデザイン」が共通のキーワードとしてあり、ビジネスの現場では、ビジョンデザインやアイデアを共につくる場をデザインし、一方、大学では、学生と子供達が共に学ぶ場をデザインし、実践的に研究を行っています。

VUCA(変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の4つの言葉の頭文字をとった造語)の時代と言われて久しいですが、予測困難な変化に満ちている今、世界的に注目されているのが「創造的な学び」です。OECDが提唱する「ラーニング・コンパス」では、「New Value Creation(新たな価値創造)」が、これからの時代に必要不可欠なスキルとして挙げられています。近年、一般化されつつある「探究学習」や「プロジェクト型学習(PBL)」は、ジョン・デューイの「行うことで学ぶ(Learning by Doing)」の考え方が根底にありますが、「創ることを通して、学ぶ活動(Learning by Creation)」を「創造的な学び」として位置付けており、これをデザインすることは教育者にとっても有用なスキルだと考えています。

「デザイン」や「創造性」と聞くと、「絵が得意な人が行うこと」と捉えられがちですが、その扱う領域は近年大きく拡張しています。例えば、社会課題の解決を目指す「ソーシャルイノベーション」のように、デザインはもはや特定の専門分野に留まらず、あらゆる問題解決に応用されています。美大や芸大だけでなく総合大学である東京大学や立命館大学が新

たにデザインを冠した学部や大学院を新設しているのも、こうした時代の流れを反映していると言えるでしょう。

2. ブリコラージュが求められる「創造的な学び」としての”野外教育”

私の野外教育との接点は、北海道教育大学、北海道大学、そして武蔵野美術大学と連携して実施している「Creative Learning Design Camp (CLDC)」というプログラムにあります。このプログラムの中で、北海道教育大学の野外教育の先生と共に、教育大生と美大生に野外教育のアクティビティを体験してもらい、その中で「創造的な学び」の力がどのように育まれるのかを探求しています。

デザインと野外教育の間に共通点を見出すならば、それは「ブリコラージュ」という概念に集約されます。レヴィ＝ストロースは、ブリコラージュを、既存の素材や道具を「ありあわせ」で創造的に問題解決する行為と定義しました。これは、単に資源の制約に対応するだけでなく、手元にある既存の要素に新たな意味を付与し、創造的な解決策を生み出す思考様式そのものを指します。

プログラムを計画している中で、野外教育の先生から「キャンプの時には河原にある石を集めて、かまどをつくることから始める」という話を伺いました。これはまさにブリコラージュ的な行為です。予測不可能な自然環境と限られた資源という状況が、ブリコラージュ的な思考と行動を自然と促すのです。こうした野外教育が持ち合わせている、「不確実な環境下で、手持ちの資源を最大限に活用し、即興的に問題解決を行い、偶発性をチャンスに変えながら、主体的に未来を創造していく」という思考は、まさに「創造的な学び」が目指している一つの姿と言えるでしょう。

3. 学習環境デザインとしての”野外”

北海道教育大学と共に CLDC での自然環境でのワークを実践する中で、私は野外教育の中には、ワークショップにおいて非常に重要な「学習環境デザイン」の要素が凝縮されていることを強く感じました。東京大学の山内祐平教授は、学習環境デザインの要素として「活動」「空間」「共同体」「人工物」の4つを挙げています。これらの要素を結びつけながら、人の学びをデザインしていくのです。

ワークショップの語源は「作業場」であり、実際にはアトリエのような場所から教室、ホールまで様々な

場所で行われます。しかし、「野外」もまた、重要な学習環境の一つです。野外では「空間」の使い方は自由自在であり、自然の中と一口に言っても、山、川、海、森、平地、丘陵と、その「空間」の切り取り方は無限にあります。また、キャンプのような共同生活では、自然と「共同体」が生成されます。そうした中で、「人工物」としてどんな道具を使用し、どんな「活動」をしていくのか？ 実は、野外教育の実践家の方々は、意識せずともこうした「学習環境デザイン」を巧みに駆使しているのだと考えられます。

4. 創造的な学びと融合する”野外教育”の可能性

元来、野外というフィールドは「生物」や「地学」といった自然科学の教科を学ぶ上で最適な場として活用されてきました。しかし、野外教育はそれだけに留まらない、創造的な学びとの豊かな融合点を秘めていると感じています。

「創造的な学び」は、特定の教科や領域を規定するものではありません。あくまで新たなものを生み出すことを通して学びを得る「手段」であり、だからこそ様々な教科や領域と融合が可能です。その中でも、野外教育との相性は格別だと考えています。

例えば、教育業界で「ジェネレーター」として有名な市川力さんは、「Feel 度 Walk」という独自の手法で、野外を舞台に「探究」のベースとなるマインドセットを育むことを目指しています。探究をはじめる前に、まず野外に出て「探検」しながら、自分の周囲の世界に興味をもつことを大切にされています。

様々な「探究学習」や「PBL (プロジェクト型学習)」のフィールドとしての野外の可能性は計り知れませんが、それ以上の深い可能性を秘めていると私は感じています。先に触れた学習環境デザインの視点はもちろんのこと、自然の中はたくさんの「材」で溢れています。この「材」には、何かをつくり出す時の「材料」という意味と、子どもたちが探究していく「題材」という二つの意味を込めています。野外というフィールドは、それ自体が活動の目的にも手段にもなりうる、奥深い場所なのです。

野外教育と創造的な学びを融合していくことで、既存の「自然体験」の枠を超える、新たな学びの形を創出できるのではないかと期待しています。今後も北海道教育大学との取り組みを通じながら、「創造的な学び」と「野外教育」との接点を模索し、その可能性を広げていきたいと考えています。

第 28 回大会速報

第 28 回大会事務局長 蓬田 高正（天理大学）

6 月 28 日（土）～29 日（日）、天理大学において日本野外教育学会第 28 回大会を開催いたしました。今大会は「ツーリズムから考える自然体験の価値」というテーマのもと、全てのプログラムを対面にて開催し、150 名を越える方々（会員 125 名、非会員 30 名、基調講演 13 名）にご参加いただき無事に終えることができました。

基調講演では、小川正人氏（一般社団法人 ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構理事長）に「野外教育と地域資源：ツーリズムを通じた新たな学びの創出」というテーマで実施いたしました。小川氏には温泉・食・ウォーキングを組み合わせた「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」という取組をご紹介いただき、どのようにしたら地域交流を活性化できるのかという貴重なお話をご講演いただきました。

シンポジウムでは、「地域資源の可能性を広げる野外教育の役割」というテーマで、基調講演に引き続き小川正人氏、島田知明氏（然別湖ネイチャーセンター インストラクター）、西村典芳氏（流通科学大学教授）にご登壇いただきました。地域に根ざす自然・文化・人との出会いを通じて、新たな学びを創出する野外教育は、観光や体験活動と融合しながら、地域資源の価値を高める重要な手段となっています。その野外教育が地域にもたらす可能性と、その未来について掘り下げることができました。

研究発表および自主企画シンポジウムでは、研究発表（口頭）14 件、研究発表（ポスター）21 件、実践報告 18 件、自主企画シンポジウム 6 件のお申し込みをいただき、多角的な視点から野外教育の意義や方法・効果などについて議論を深めることができました。若手優秀発表賞（選考対象 6 件）は、伊藤相氏（東京外国語大学）「スウェーデンの野外教育

におけるロマン主義 -Friluftsliv とナショナル・アイデンティティ形成に関する史的研究-」が受賞されました。そして、情報交換会では、奈良の地酒を飲みながら、久しぶりに顔を合わせる方々も多く、会話が弾み懇親も深まり有意義な時間になったことと思います。

また、今大会の運営におきましては、大会参加申込を全て参加費決済システム「Peatix」にて行い、参加申込の簡素化を行いました。また、今回は新たな試みとして株式会社モンベルの福島正和氏にお越し頂き、企業と大学・地域との連携事例として株式会社モンベルから情報提供をいただき、野外活動を通じた大学や地域、社会の連携を考える場となりました。託児についても地元の訪問保育事業者に依頼して体制を整えるとともに、協賛金より託児料を支出することができました。

当日は不慣れなことで不行き届きの点が多々あったかと思いますが、おかげさまをもちまして日本野外教育学会第 28 回大会の全てのプログラムを滞りなく開催することができました。お集まりいただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。また、大会開催にあたり、株式会社モンベル、大阪体育大学、株式会社プロジェクトアドベンチャージャパン、公益財団法人日本アウトワード・バウンド協会をはじめ計 23 の法人・団体・個人よりご支援をいただきました。また、天理大学より共催名義、天理市および天理市教育委員会より後援名義をいただきました。この場をお借りして関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

なお、第 28 回大会の詳細の報告は次号のニュースレターで掲載、基調講演・シンポジウムにつきましては次号の学会誌に掲載する予定です。

【若手コラム】

今回の第 101 号ニュースレターからの新企画として、学会員の若手によるリレーコラムをスタートいたします。若手会員の皆さんが日頃抱えている思いや、実践・研究に対する考え、さらには学会に対する期待や提案などを、自由に、そして率直に発信していただければと思っています。

記念すべき第 1 回の執筆者は、びわこ成蹊スポーツ大学の橋本和俊さんです。

今後の連載にも、どうぞご期待ください。



橋本 和俊（びわこ成蹊スポーツ大学）

大分県中津市出身。京都教育大学教育学研究科修了。修士（教育学）。びわこ成蹊スポーツ大学アウトドア・スポーツコース講師。専門は野外教育学。自然・アウトドアで「楽しむ」ことを『フロー：Flow』の概念から研究中。

私が野外教育の世界に足を踏み入れたのは、大学3年生の頃でした。当時はアスリートとしてバスケットボールに打ち込み、高校の体育教員を目指していました。しかし、進路について模索していた中で、心の奥底にあった幼少期の自然体験の記憶が、再び息を吹き返しました。

子どもの頃の私は、一人で虫取り網と籠を持って森に入り、釣竿と餌を手に海辺へ向かい、河口でウナギを釣るような少年でした。スコップとバケツを持

って潮干狩りをしたり、偶然カブトガニを見つけては胸を高鳴らせたりと、自然の中で夢中になって遊んでいました。そうした体験を通して、私は自然の魅力とは「昨日と違う今日がある世界」であると感じていました。同じ場所であっても、毎回違う表情を見せてくれる自然の中で過ごした日々が、私の原点となっています。

このような原体験こそが、野外教育に対する関心と情熱の出発点となりました。自然の中で得られる学びや気づきを、今度は教育というカタチで他者に伝えていきたいという思いから大学院に進学し、現在は大学で野外教育を専門に教えています。

自然の中での活動は、ただ楽しいだけでなく、「課題をどのように乗り越えるか」という実践的な学びにも満ちています。時には困難に直面しながらも、自ら考え、工夫し、達成することによって得られる感動や爽快感は、自分の中に深く刻まれる「生きた学び」であると感じています。そして何よりも大切なのは、「楽しむ」ことだと思っています。その楽しさこそが、人を前へと進ませ、学び続ける力になると確信しています。

DX や VUCA と呼ばれるデジタル化・予測困難な時代であるからこそ自然を活用した学びの意義が多分にあるのではないのでしょうか？楽しみながら学ぶ環境や機会・活動が多くあるのは自然の中だからこそだと、私は確信しています。

今後も、私は自然と人について『楽しさ』の概念を中心に教育や研究を追求していきたいと思っています。

【海外研修報告】

Kia Ora from Aotearoa New Zealand : ニュージーランドからこんにちは

岡田 成弘（東海大学）

私は、東海大学の特別研修期間制度を利用してもらい、ニュージーランド（以下、NZ）にきています。NZ 南島の Christchurch に滞在し、University of Canterbury に所属しながら、NZ のアウトドア文化や野外教育を学んでいます。

NZ と日本はいずれも南北に長い島国で、四季があり、山や海など豊かな自然に恵まれています。その自然環境や文化は観光資源としても活用されています。また、自然災害が多く、地震や台風（ハリケーン）に見舞われることも共通しています。もちろん相違点もあります。NZ は人口約 500 万人で、日本の約 1/24 です（国土面積は日本の約 7 割）。NZ は多民族・多文化国家で、私が住んでいる地域の小学校に、20 カ国以上の国籍をもつ子どもが通っています（その中で、アジア人 4 割以上）。イギリスの植民地だったという歴史をもつ一方で、先住民族マオリの文化や価値観が尊重されており、生活や教育の様々な場面でその影響がみられます。

私が NZ に来てまだ 3 ヶ月ほどですが、ここでは国全体でマオリ文化を大切にしていることが強く感じられます。なかでも印象的なのは、マオリの人々が土地や祖先とのつながり（whakapapa/ファカパパ）を非常に重視していることです。例えばマオリには mihi（ミヒ）という自己紹介のスタイルがあります。

これは、自分自身のルーツやつながりを共有することで相手との関係性を築こうとするものです。「自分という存在は、場所や共同体とのつながりの中にある」という考え方に基づいているため、最初に山や川、所属などを紹介し、その後に自分の名前を名乗ります（例：「私の山は△△、私の海は○○、私の所属は□□、私の名は～です」）。マオリに限らず、NZ の多くの人がそれぞれの mihi を持っています（スマホや PC にメモしている人もいます）。また、マオリの新年である Matariki（マタリキ）が 2022 年から国民の祝日として制定され、様々なイベントが開催されていたり、小学校でも大学でもマオリについて学ぶ機会や授業が多くあります。

そして、NZ の野外教育でも、このマオリの文化や価値観を活かそうという試みが見られます。大学の野外教育の授業では、マオリの歴史や思想を学ぶ時間があります。NZ の野外教育の専門書では、これまでの西欧的な冒険活動への偏りが指摘され、NZ の野外教育の独自性として、土地/場所とのつながりに目を向けるプログラムやマオリ文化について、インタープリター（説明・解説）の重要性が述べられています。私はマオリの価値観を野外教育に取り入れることをテーマとした、教員向けの研修会に参加しましたが、マオリの歴史や土地とのつながりを学ぶ時



マオリ文化において重要な NZ 固有の植物「ハラケケ」にふれる



小学校でもマタリキについて楽しみながら学ぶ

間や、野外教育におけるストーリー（物語）やアート（芸術・音楽等）の力を感じたことが、私のとって大きな学びになりました。日本の伝統行事、里山文化、修験道、神道や仏教の思想と比較してみると、多くの共通点に気づくと同時に、日本の独自性を再認識する機会となりました。もちろん、マオリの要素が NZ のアウトドア文化全体に浸透しているわけではありませんし、野外教育の現場においてもその取り組みはまだ十分とは言えないようです。残りの期間でさらに学びを深めたいと思います。

最後に少しお知らせです。このように私が海外に

飛び出そうと思ったきっかけは、International Outdoor Education Research Conference (IOERC) という国際カンファレンスでした。2024 年 3 月に 10th IOERC が東京で開催されましたが、次回 IOERC は 2026 年 6 月にノルウェーで開催されます。Call for abstract が公開され、発表申込・抄録締切は 11 月 15 日となっています。10th IOERC で日本の研究発表に興味を持ってくれていた海外の野外教育者もたくさんいたので、是非日本から多くの発表をしにいきましょう。詳細は、[web サイト](#)をご覧ください。

【新刊紹介】

『アウトドアセラピーズ

実践入門 その可能性とまなざし』

編 著：ネヴィン・J. ハーパー／ウィル・W. ドブド

監 訳：吉松 梓／土方 圭

翻 訳：黍原 豊／佐藤 冬果／竹内 靖子

中丸 信吾／野口 和行／花田 道子

発売日：2025 年 3 月 20 日

定 価：3,520 円

発 行：晃洋書房

<https://www.koyoshobo.co.jp/book/b659190.html>

【第Ⅰ部 基礎理論】

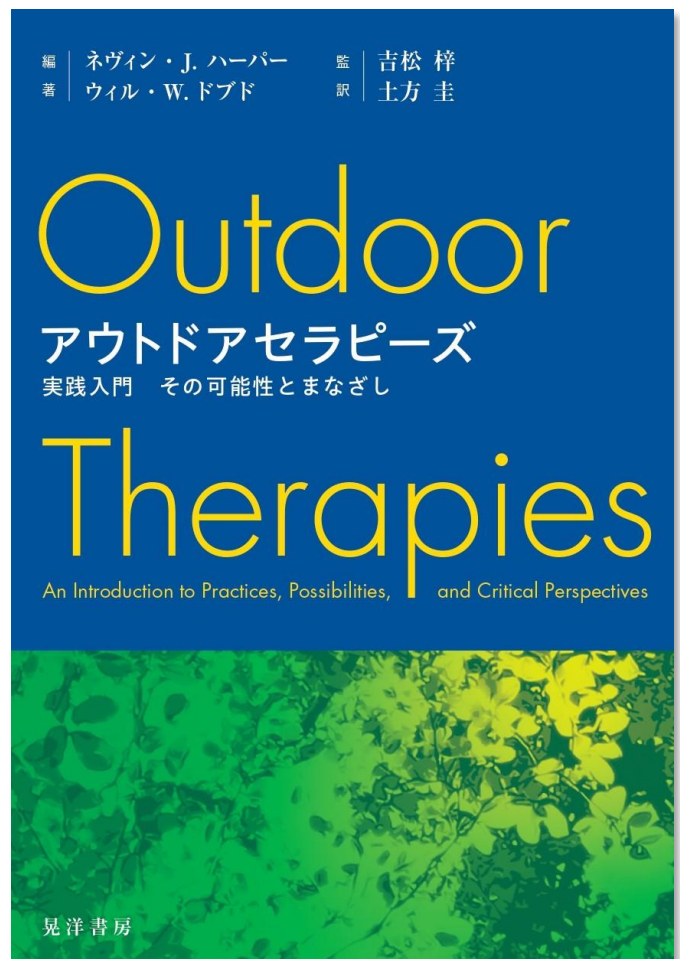
- 第1章 アウトドアセラピーの紹介
- 第2章 野外における体験型ファシリテーション
- 第3章 生態心理学アプローチによるセラピー
- 第4章 アウトドアプログラムにおける
サイコロジカル・ファーストエイド
- 第5章 土地に根ざした癒やしの教育法

【第Ⅱ部 実 践】

- 第6章 ウィルダネスセラピー
- 第7章 アドベンチャーセラピー
- 第8章 ネイチャーベースドセラピー
- 第9章 馬・動物介在療法
- 第10章 ガーデンセラピーと園芸療法
- 第11章 自然と感覚統合と小児作業療法
- 第12章 サーフセラピー
- 第13章 森林療法

【第Ⅲ部 批判的視点と結論】

- 第14章 アウトドアセラピー実践の批判的視点
- 第15章 アウトドアセラピーの今後の方向性



まずはドアを開けて、一步自然の中へ
五感を満たす自然環境で活動することは、オフィスにこもりがちな現代人に「自然の一部としての人間」の感覚を取り戻させてくれる。
本書では、アドベンチャーセラピー、馬・動物介在療法、サーフセラピー、森林療法などの事例を通してアウトドアセラピーの可能性を探る。

世界各国の専門家が執筆参加し、アウトドアセラピー分野の基礎文献として高く評価されてきた書籍『Outdoor Therapies』(原題)が日本語に翻訳され、『アウトドアセラピーズ 実践入門 その可能性とまなざし』として刊行されました。本書はアウトドアセラピーや自然を活用した治療・教育・支援に携わる実践者・研究者たちによる共同執筆で、理論と実践の両面から、世界各地の多様なアウトドアセラピーの可能性を幅広く紹介しています。

第1部では、「なぜ今、アウトドアでのセラピーが必要なのか」を問い直しながら、その理論的な背景として体験教育や生態心理学との関連、さらには先住民族の土地に根ざした癒やしの実践について語られています。

第2部では、8章にわたり豊富な実践例を紹介しています。たとえば、家庭内暴力からの回復を支援するアドベンチャーセラピー(オーストラリア)、ネイチャーゲームで知られるフローラーニングを取り入れたネイチャーベースドセラピー(カナダ)などです。

各章が、理論・研究・有効性、実践のためのディスカッション、事例紹介といった項で統一構成され、同分野の総説文献としても、現場のノウハウを知る実践書としても有用です。

第3部では、アウトドアセラピーの課題や今後の方向性、倫理的配慮についても批判的に論じられており、単なる実践ノウハウ本にとどまらず、これからの野外教育・キャンプ指導に携わる人々が直面するであろう問いや責任についても考えさせられる内容となっています。

アウトドアセラピーの理論と実践を体系的に学びたい方、キャンプや野外教育の新たな可能性を探りたい方に、ぜひ手に取っていただきたい一冊です。多様な実践例や理論的枠組みは、日々の指導やプログラムづくりのヒントとなることでしょう。自然と人との関係性を見つめ直す羅針盤として、本書を活用してみたいかがでしょうか。

(文責：吉松 梓)

【イベント告知】

第29回日本キャンプミーティングのご案内

キャンプミーティング実行委員

佐藤 冬果(東京家政学院大学)、青木 康太朗(國學院大學)、中丸 信吾(日本女子体育大学)
野口 和行(慶應義塾大学)、花嶋 桃子(南房総市大房岬自然の家)、矢野 達也(日本文理大学)
蒲 健吾(日本キャンプ協会 事務局)

本年も、公益社団法人 日本キャンプ協会が主催する「日本キャンプミーティング」が開催されます。本事業は、国内外のキャンプの実践発表や研究発表を通じて、参加者同士が交流し、情報交換を行い、それにより新しい知見とネットワークを提供する「キャンプについて語り合える場」として1996年から開催されており、本年度で第29回目の開催となります。

本年は「もーっとつながる」をテーマに、「つながる」をテーマに開催した昨年度のプログラム内容をさらに充実させて開催します。全国各地で多様な「キャンプ」に関わる多様な方々が集い、話をし、つながる機会としたいと考えております。会員の皆様も、是非、

キャンプ仲間や指導されている学生さんなどと一緒にご参加ください。

みなさんの「キャンプでやりたいこと」は何ですか？キャンプは、教育や福祉、地域活性や環境保全、企業研修等々、多種多様な分野において行われ、その目的もさまざまです。

「どんなキャンプが行われているのか知りたい！」

「キャンプが好きな同世代と話してみたい！」

「キャンプのことを相談する先輩が欲しい！」

「一緒に活動する仲間が欲しい！」…

キャンプミーティングは、キャンプ初心者も、ベテ

ランも専門家も、多様な世代、分野、業種、そして地域を超えて集い、学び、話し、つながる場です。みなさんの「やりたいこと」に近づくヒントが「人とのつながり」に眠っているかもしれません。ぜひ、参加してつながりを広げませんか？

日時：2025 年 11 月 8 日(土)

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

国際交流棟 1 階

(東京都渋谷区代々木神園町 3-1)

※ 小田急線参宮橋駅下車 徒歩約 7 分 / 地下鉄千代田線 代々木公園駅下車 徒歩約 10 分

募集定員：180 名

参加費：一般 1,650 円、学生 550 円

※ 懇親会に参加する場合は、別途大人 4,400 円、学生 2,200 円が必要(11/4 以降のキャンセルの場合は、返金はありません。)

主催：公益社団法人日本キャンプ協会

タイムスケジュール (予定)

- 10:00 開会式・全体交流タイム
- 11:00 ワークショップ (前半)
- 12:30 ランチ交流タイム
- 13:30 キャンプの実践・研究発表、団体・企業紹介
- 15:15 ワークショップ (後半)
- 16:45 全体交流タイム
- 18:00 懇親会

プログラム (予定)

- ◎ワークショップ
- ◎キャンプの実践発表・研究ポスター発表
- ◎全体交流会
- ◎つながるランチ会
- ◎キャンプ用品譲渡会
- ◎キャンプ・アウトドアに関わる団体・企業紹介
- ◎アウトドア団体求人掲示板
- ◎懇親会

ワークショップ例

- ◎アイスブレイク 100 本ノック！
- ◎JOLA ファイナリストに聞く「わたしの原点」
- ◎これからの社会で求められる青少年教育施設とは
- ◎プロジェクトアドベンチャー(PA)体験
- ◎自分のキャンプを発表しよう！～実践紹介ってどうやるの？～
- ◎キャンプ×AI＝？～何ができるのか考えてみよう～
- ◎絶対に間違えてはいけない毒ヘビと無毒ヘビの見分け方
- ◎多角的に考えるキャンプの安全
- ◎身近な自然で遊び、学んでみよう

プログラム詳細は下記 URL に掲載されます。

<https://camping.or.jp/campmeeting-in-japan/29thcmj>





日本野外教育学会